

手紙からみる戦争—細見綾子生家資料調査報告—

神戸大学大学院人文学研究科
井上 舞

今日の講座について

現在、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターが調査中の細見綾子生家資料には、細見綾子宛の手紙が多く残されていました。今回の講座では、これらの中から、戦時中の手紙を取り上げ、当時の芦田村の様子や、人々の心情を垣間見ていきます。

細見綾子生家資料について

細見綾子（明治40年/1907～平成9年/1997）

氷上郡東芦田村（現青垣町）に、細見喜市・とりの長女として生まれる。柏原女学校を経て、日本女子大学に進学。20歳のとき、東大医学部助手であった太田庄一と結婚するも、2年後に死別。自身も肋膜炎となり、東芦田村へと戻り療養生活を送っていたところ、医師で俳人の田村菁斎の薦めにより、俳句を作るようになる。

昭和17年3月、第一句集『桃は八重』出版。同年、後に夫となる沢木欣一と出会う。昭和21年、沢木が創刊した俳句雑誌「風」に同人として参加。翌年、沢木と結婚。石川県金沢市での暮らしを経て、東京都武蔵野市に転居。昭和50年（1975）、句集『伎芸天』で芸術選奨文部大臣賞を受賞、同54年、蛇笏賞を受賞。

その生涯は、「丹波人と繋がりながら丹波とともに過ごした一生」（山崎2023）であった。昭和40年には、芦田小学校の校歌の作詞を手がけた。

細見綾子生家資料

- * 明治～昭和にかけての資料群。芦田村に関する地域資料、細見綾子関係書簡類等で構成される。
- * 細見綾子生家資料の書簡資料
 - 明治期の細見家関係の書簡類
 - 細見綾子関係の書簡類

手紙からみる戦争①－人々の心情－

※ 手紙の掲載について、旧字体は新字体に改めた。また、適宜、改行、句読点を追記した。
原則として個人名は伏せた。

1 文面に表れた戦争

- 「灯火管制のほのぐらい机で認めました。乱筆お許し下さいませ」(SI8.7.15、東京・U氏→細見綾子)

- 「昨日は誠に結構なる小包御送り下さいまして誠にありがとうございました。御陰様にて十分勤労奉仕には活躍できるのを喜んで居ります。」(S18.7.18、京都・I 氏→細見綾子)
- 「休みと言っても今年は生徒をつれて方々の工場に勤労奉仕に参りますので落ち着きません」(S18.8.10、東京・H 氏→細見綾子)
- 「空襲の下にも牡丹は静かに咲き匂ふてゐます。」(S17.4.22、西宮市・T 氏→細見綾子)
- 「そちは防空訓練でいそがしいさうですね」(S17.10.1、細見永子→細見綾子)

2 物資の不足

- 「焼のり少々お送り致しました。東京でもこの節はのりがなかなか手に入りません」(S18.8.10、東京・H 氏→細見綾子)
- 「さてこの度主人病氣につきまして、何より結構な卵を沢山お送り下さいまして誠に有難う存じました。唯今は何かにつけてほんとうに得難く病人は一番困ります。特に卵はなかなか手に入り難く大変困つて居りました所でほんとにうれしう存じました。」(S18.9.2、大阪・M 氏→細見綾子)
- 「尚々中新宅井戸山本苗植込ミ及栗住山補植共完了せり。左様御承知下さい。人夫不足の為め井戸山は拙老及はし枝へも植へに行きました。久し振やら初めての木苗植へでした。之も戦時(非常事為)と思ひ奮発しました。」(S18.4.2、細見東峰→細見綾子)

3 戦争に対する感情

- 「残暑はげしく、戦争も苛烈と拝奉。皇國の将来は如何にやと存じ候。■民我ら一億火の玉となり米英をうつべき事こそ国民としてなすべき事と存じ候」(S18.9.14、奈良・N 氏→細見綾子)
- 「こんな時代に若い男の子が療養生活をしなければならない様なのはほんとに可愛うだと思ひます。「若いものはやつぱり敵をやつつけて来てやると云ふ様なのがいい。そんな奴がとてもえらく見える。俳句などと云ふ様なのは、犬に食はれてしまへと時々思ふ事もある」等と申しております。「病気を苦にして死んだと云ふ奴の気持がこの頃はほんとに分る」とも云つておりました。(中略)

0 が三月か四月頃帰つて来る様に云つた兵隊さんがゐて、お正月の頃はそれもほんとうなら嬉しいと思つてましたけど、その後の戦況はとてもそんな事信じられなくなりました。マリアナ諸島なんて地図を見れば 比島の直ぐそこですもの。とてもそんな所にある人が帰つて来られそうもありません。それも致方がありませんみんな血を流してゐる時、どうぞ元気でお国の役に立つてくれる様にと本気で願つております。この頃は何かしらやたら寂しかつたり、悲しかつたりいたします。」(S19.3.18、京都・O 氏→細見綾子)

手紙からみる戦争②－戦中の芦田村－

1 金保有状況調査についての書簡

- * 日中戦争勃発以降の、政府による金の集積 →爱国献金運動へ
- * 大蔵省令第22号：7月1日付で、金の保有状況を調査。
- * 昭和14年5月20日「大阪日日新聞」に、物資の国勢調査に関する記事あり
- * 昭和14年6月22日～、「東京朝日新聞」に5回にわたって金の国勢調査に関する解説記事が掲載。

[資料①] 昭和14年5月26日細見喜作差出細見綾子宛書簡

珍ハ、本月廿一日毎日新聞記事ニ有之又世間でもやかましく云ひ出して居ります「金」の総動員ニ付て、七月一日を期し金類全部の国勢調査ある趣、既に御承知の事と存じますが拙者方のものどうしたらよいか右顧左考（ママ）熟慮の結果、大蔵省へ報告（全所持分）するが良策だろうと決心しました。

若し届出せずに秘蔵して居つた所で、今後或十年間ハ売却することも人ニ見せる事も出来ぬ故、結果死蔵であつてしまします。届出して置けば、若し政府に必要があつたら真正の値段で買上げてもらうから。又、政府に必要となれば、国民として致し方ないと存じます。又、届出しておいても其内に売却もできない事もないし、又、今直ちに売却する必要も（拙者方ハ）ないと思います。而して大蔵省への報告ハ直送するのだそうですから、役場や調査委員へハ少しも知れぬようです。

右により報告の節紀念に残したかつたら、少し許り残し置けばよいでせう。尚古金ハ（本家より貰つたので）本家に記帳があるので本家とは一の歩調を取らねばもし間違ひが起つたら罰金があるので迷惑と思ひ、○氏に相談したら、○も全部報告する考へだと答へました。

右参考までに通知します。お前さんは如何なさる考へですか。いつれにても熟考置きなさるがよいと思います。

（後略）

※1枚目左端に、朱書で「此書面御読の上ハ焼捨て下さい」とあり。

2 献納機「氷上郡民号」についての書簡

- * 国防献金：第2次世界大戦中に、官・民から国防品購入のためとして、軍部に献上された金銭。
- * 昭和7年1月、陸軍愛國1号、2号が献納。遅れて海軍でも始まる。陸軍に献納された飛行機は「愛國号」、海軍に献納された飛行機は「報国号」と呼ばれた。
- * 氷上郡民号：昭和19年5月～6月の間に献納された。3532号「第一・氷上郡民」、3533号「第二・氷上郡民」、3534号「第三・氷上郡民」。いずれも、二式単線。（HP：陸軍愛國号献納機調査報告より）

[資料②] 昭和18年4月細見千鶴子差出細見綾子宛書簡

空襲も必至になりました。今年の桜は敵が爆戦で散らすとか言つて居りますが、もつといろんなものこちらへ送られてもいいと思ひますが。

それから氷上郡民号を二十万円で献納する事になりました、東は頭株で沢山献金してくれと言つて来まして、宅等も沢山出しましたが、姉さんの分は住民税の率で割当と来ましたので三十七円出す事になりました。御承知下さいませ。本家、○○・○○が三百円、東の姉ちゃん二百円、宅が百八十円です。

3 食料の供出と郵便事情

食料の供出

- * 昭和15年6月、6大都市で砂糖・マッチの切符配給制が実施。その後、全国に広がり、やがて配給は主要な食糧、衣料、日用品に及ぶ。
- * 昭和15年10月、農林省令「米穀管理規則」公布→自家保有米を除いた米を、国が買い取り
- * 昭和17年2月「食糧管理法」制定→食料の国家管理の強化

郵便事業

- * 昭和15年11月、米穀及び木炭を小包として送ることを禁止。容積および重量の制限強化。
- * 昭和18年4月、非常時の配達停止、制限の実施。生鮮食品の小包の引受停止。
- * 昭和18年以降、検閲官が必要と認めた場合は、有封書状も開封・検閲

〔資料③〕昭和18年1月20日細見千鶴子差出細見綾子宛書簡

大豆の荷がこわれて居りました由、空はぬかれてゐる事と思います。お餅等でも、のし餅にして置くと大丈夫でせうが、小餅にして送ると随分途中で減るそうです。

〔資料④〕昭和18年3月7日細見千鶴子差出細見綾子宛書簡

御申越しの○○さんのお米の事は先日申し上げましたやうに、宅で二石一斗余り、御姉様の分で八斗五升余り、供出致さねばならぬ事になりました、農家はいよいよ決戦体制となりました。自家保有米の二割乃至四割、又は其の地区の平均反当収量に及ばぬものは、保有米の内からでも供出せねばなりません。

例へば芝添地区の平均収量二石四斗と測定されまして、組合又は地主へ出した米と保有米とが自分の耕作反別で割つて、平均収量二石四斗に足らぬ時は保有米がなくなつても出さねばなりませんのです。

宅等は餅米を作つて居りましたのが、作柄が下手で、反当収量が平均額に足りませんので、その不足分で糯米が集つてゐた分と、保有米の二割五部でこれだけのものを出すのです。お姉様の分では内密に貯つた○○さんや、○さんが作柄が上手で、二石四斗以上取つた人でしたので、自分の宅の供出米もごく少しうみましたし、二等米も持つて居りますので、内密米を返してくれとも言ひませんので、糯米を残して居りました八斗五升がまだ供出されてゐないから、これを出せと言はれただけでうみましたが、○○さん等は内密に貯つてゐたのを、自分の家がやり切れぬので返してくれと

言つて来て困りました、と言つてゐ■れました。小作人がこの地主へ何石何斗何升納めたと付け出し、地主は反別がいくらあつて、米いくらを何兵衛から貰つたと出しますので、もう少しの都合も付きません。

農家の楽しみだつた一念講・觀音講等全部申合せとし、当分やめになりました。又、駅々でも近頃の取締りは全く厳重になつて居ります。米麦雜穀の外に加工品も一切持出禁止となりました。小包でもおかき等とうつかり言つたら駄目ですし、駅でも局でも少し重いものは皆解いて調べます。こんな様子で一斗等と言ふ米は到底、■通も出来ませんし、又恐らく持ち歩けないと想います。それで、夏お帰りになつても米は一粒もない事になつて居りますので、一ヶ月前から配給米の申請をして置かねばなりません。そうでないと内緒米のあつた事がすぐ知れますから大変です。

こんな事で、○○さんの方はお気の毒でも、当分の間はお断り致さねばなりません。村中一日一食は必らず代用食になつて居ります。小麦粉も米同様出されませんが、○○さんが少しづゝならなんとかしますと言つてくれますから、適當な折を見て○○まで届けます。夏お帰りになつてからの米は、近所から少しづゝ分けて貰へると思います。幸芝添は皆百姓上手で、平均収量以上にとつてゐますから、何とかしてくれると思います。未年の年貢と差引も出来ます

(後略)

[資料⑤] 昭和18年11月27日細見千鶴子差出細見綾子宛書簡

(前略) お米は大変不作で大分免合話も片附きましたが、本年は保有米も大半供出する事になりまして、後半は配給米を食べねばならぬかと思ひます。お姉さんの米を大分あちこち頼んで見ましたが、本年はどもこ手に入りません。ひどい家は作つた米全部供出せねば足らぬと言ふやうなのがあります。(後略)

[資料⑥] 昭和18年12月19日細見千鶴子差出細見綾子宛書簡

(前略) ○○様より頼まれて居ります猪は、前便で申しましたやうに、去年のやうにはなりませんので困つて居りますが、手に入る機会があればあちこち頼んであります、どうしても何かものを持って行つてやるとありやすいと言う状態ですので、仕方ありません。鶏も頼んで居りますので、今小さいのが一羽手に入りましたので、もう一羽どこかで探して送りたいと思ひますから、二三日中に○○の○○氏まで送ります。

鶏も大変な闇で、もうとても四円五円では買へなくなりまして、あんまり高くなるので買つてもどうかと思はれます。それに食鶏として供出割当が来まして、番が来ましたら卵を産んでゐるので出さなければ飼が来ません。(後略)

[参考]『青垣町誌』第四編第一章第四節「戦後の混乱」p.400

生産地帯である当町も、全国的な食糧不足の圏外に安住することはできなかった。農家はある程度生産者としての自由はあったにしても、きびしい供出に追われ、非農家や疎開者は生きるために、都会の人たちと同様食べものの入手に狂奔した。江戸時代の享保、天明の大飢饉にも似て野草や木の芽をさがし求める人の姿が山野に

絶えなかった。稻土部落の入口、水座橋のほとりに「野草、木の芽採りに部落内へ入るべからず」の立て札が建てられたことは、当時の状況を物語るものといえよう。

おわりに

帰り来し命美し秋日の中（細見綾子、昭和20年作、句集『冬薔薇』所収、前書に「十月廿五日沢木欣一氏帰還三句」）

* 青垣町の日中戦争、アジア太平洋戦争の戦没者 →474名

引用・参考文献

- HP：細見綾子・沢木欣一 俳句アーカイブ（2025.07.24 最終閲覧、
<https://scrapbox.io/kazesabou/>）
- 山崎祐子『細見綾子の百句』ふらんす堂、2023年
- 氷上育英会『丹波人物伝』、丹波新聞社、2014年
- 『日本銀行百年史』第4巻、日本銀行百年史編纂委員会編、1984年（日本銀行HP：2025.07.24閲覧、
<https://www.boj.or.jp/about/outline/history/hyakunen/hyaku4.html>）
- 横川裕一「陸軍愛国号献納機調査報告 その1【愛国1号、2号】」（『航空ファン』60巻10号(通号706)、文林堂、2011年10月、p.84~87）
- HP：陸軍愛国号献納機調査報告（2025.7.11閲覧、
https://www.ne.jp/asahi/aikokuki/aikokuki-top/Aikokuki_Top.html）
- 日本郵政グループ『郵政150年史』2022年（日本郵政HP：2025.07.24閲覧
<https://www.japanpost.jp/corporate/milestone/chronicle/index.html>）
- 『青垣町誌』青垣町、1975年